

---

# 深夜2時

悲劇のM

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

深夜2時

### 【Nコード】

N6264E

### 【作者名】

悲劇のM

### 【あらすじ】

懲りずにまたツンデ霊です。だが反省はしていない。

「誰だ!!」

俺は背後に気配を感じて振り返った。

だが、誰もいない。いるはずなかった。扇風機が忙しく回っているだけだ。

こここのところ、背後から気配を感じるのは日常茶飯事となっていた。友達と墓場に肝試しに行ったのがマズかったのだろうか。

俺はそんなことすぐに忘れようと、蒸し暑く汚い部屋で作業途中のジグソーパズルを再開した。

ジグソーパズルは丁度1時間で完成した。俺は鑑賞する時間を設けずに、50×50の法隆寺の絵を崩し、今回のタイムを上回れるよう角のピースから埋め込んでいった。時計の短針は2時を回っているのにこんなことの繰り返し。親が旅行に行っている週末に何をやってるのだろうと、俺はため息をついた。

半分程ピースを埋め込んだところで睡魔が突然やってきた。硬いベッドに横たわり、重い瞼を閉じた。

直後に俺は、そいつの声を聞いたのだった。

「……今すぐ逃げて……」

か細い、どこか悲しげな声が耳を經由せず脳に直接届いた。

気のせいだろうと俺は寝返りを打った。

「……早く……外に出て」

その声で、俺は目を開けた。開けてしまった。

そこには年の頃自分と同じ位の少女が鎮座していた。何故かは分からない。彼女が幽霊だと直感した。

見知らぬ制服、細身で髪が長く、整った顔立ちに俺は思わず見とれてしまった。

数秒の沈黙が流れた後、俺は少女に聞いた。

「君は？」

何故だろう。こんな状況なのに興奮はおろか緊張もしなかった。

恐怖心なんて論外だ。少女が誰なのかという疑問だけだった。

『早く外に出ないと……手遅れになる』

このままではイタチごっこになると察した俺は言われるがままに外に出た。

外では夜の生暖かい風が頬を優しく撫でた。見上げた空は雲一つ無く、月明かりが俺を照らした。

俺の耳に猫の声が入った次の瞬間

爆発音が響き、眼前の家が炎に包まれた。

突然の出来事に俺は腰を抜かした。同時に、やかんの火を付けっ放しだったのを思い出すのだった。

俺は暫く放心状態にあった。意識がはっきりとしたのは消防が駆けつけ消火作業している時だった。

その後どうなったのか覚えていない。気が付けば公園のベンチで朝日を拝んでいた。

俺は起き上がり、自宅へと向かった。半焼した家があった。

そして、俺の目の前にそいつが現れた。というより、浮かび上がった。長い髪を靡かせる細身の少女。昨日の少女だった。

俺は少女に話し掛けた。

「あの、昨日は助けてくれたんだよね。ありがとう」  
すると少女は顔を反らして言った。

「勘違いしないでよね、あんたを殺すのは私なの。あそこで死なれたら殺せないじゃない」

「でも、お陰で命拾いできたよ」

「な、何言ってるの？ 私はあんたを殺そうとしてるのよ。なのに、お礼なんて」

「俺は君のお陰で助かったんだ。素直に俺のありがとうを受け取ってよ」

俺は少女の手を取った。すると少女は火が出そうなほど顔を赤くしてこう言うのだった。

「う、うるさい！ あんたなんか呪い殺してやるんだからね！ 覚悟しなさい！！」  
少女はどこかへ消えていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6264e/>

---

深夜2時

2010年10月17日02時04分発行